

こころの科学と哲学

土屋俊
(千葉大学)

背景

- (西洋哲学では) こころの科学と哲学とは同根
 - アリストテレス
 - デカルト
 - ハートレー
- こころの科学の19世紀における成立
 - 心理学
 - 精神分析
- こころの科学の20世紀での展開と哲学の対応
 - 学習理論、認知科学、人工知能、脳科学
 - 現象学、「心の哲学」、Neurophilosophy、など

現代のこころの科学からの哲学的関心

- 脳科学、神経科学の著しい展開
 - 電気生理的研究による機能局在論
 - このニューロンがこの機能を持つ、など
 - 非侵襲的手法の開発によるある種の機能局在論
 - この辺りが、このような機能が働いているときに活性化されている、など
 - 認知的諸機能の脳科学的対応の確認
 - 「非認知的」側面への関心
 - 意識
 - 「クオリア」
 - 自己意識
 - 人格の統一性

心の科学の展開を受けた哲学の展開

- 20世紀の哲学を特徴づける「言語的展開」
 - これによって、一時的に「こころ」から離れる
 - ウィトゲンシュタン
 - メルロ＝ポンティ
 - 言語、社会、身体
 - 学習理論などを通じる時代意識
- 機能局在論の成果からの機能主義
 - 計算機メタファーの成立 (人工知能研究の発達)
 - チューリングマシン機能主義
 - 物理的な実現の多様性

認知主義の成立と崩壊

- 認知主義
 - 表象
 - 形式性
 - 計算可能性
- 問題
 - 学習
 - 発見
 - 状況依存性
- 1980年代における大きな展開

消去主義的哲学

- 科学の発達によって、「こころ」をつかう話し方はなくなる！
 - 特定の心的現象は特定の脳の状態と対応する
 - 痛み ⇔ C繊維の発火
 - 顔の認識 ⇔ 特定のコラムの興奮
 -
 - その心的現象についての言葉遣いは、脳の状態についての言葉遣いによって置き換えられる
- 科学の進歩、教育の改良によって、言葉遣いは変更可能
- 今は、未熟なので「こころ」が必要なだけ

消去主義哲学はかなり強い立場

- 心の科学の自然な発想を反映
 - しかじかの心的現象とその記述の存在
 - 指の痛み、恋の悩み、将来への不安
 - 時計を見る、母親を思い浮かべる、計算する
 - その現象と同時に生じている脳状態の変化 (ニューロンの発火、血流の増加etc) の発見
 - 両者の対応の法則性の確認
- 脳現象だけが客観的に測定可能
- したがって、こちらが実在的で、心は「日常的言い回し」

脳現象だけが客観的に測定可能？

- 「測定技術」の変遷はどういう意味をもつか
 - 脳波
 - 電気生理的研究
 - 非侵襲的研究 (PET、fMRI、超音波などなど)
- 「こころ」についての言明は客観的でないか
 - みんなが同じ言葉を使って、理解できているとおもっているのはなぜか？
 - そのなかで、命題的なもの (知る、信じる、望む、見るetc) は、その内容が客観的であり、共通している
 - 目の前に蠅を見る、その蠅を食べたいと望む、舌を出せば蠅を食べられると知っている、

対応は必要条件

- 自然現象の因果関係

- 一定の状況において、ある条件が整えば、ある結果が生じる
 - したがって、その条件 (=原因) は十分条件の不可欠の一部を構成する

- こころの科学の対応関係

- 一定の状況において、ある心的現象が生じているときには、ある脳状態が生起している
 - したがって、脳状態は必要条件にすぎない
- 必要条件は、記述と理解の役に立つが、説明にはならない

最近の関心

• 意識

- 機能局在論の欠陥：統合を保障しない
- 人間のこころは「統合されている」ように見える
 - 部品の認知のない全体の認知
 - 人格の統一
- 経験的知見の可能性

• クオリア

- 機能とは関係ないが心的な現象として存在するように思われる
- それに対応する脳現象が存在する

こころの科学と哲学との健全な関係

- 問題整理としての哲学
 - 考慮すべき別の文脈の指摘
 - ひとつの考え方の波及効果の検討
 - 全体像の提示
- 問題発見としての哲学

試み

- 消去主義哲学の可能性
 - 教育は本当に改善できるのか
 - 新しい測定方法をどのように位置づけるか
- 心的内容の外在性
 - 知識 (内容) とワールドワイドウェブ
 - 知識の継承と蓄積
- こころに関する行為の構造の研究
 - 行為はこころのアウトプット
 - 行為の名前の複雑さ (達成と実施)
 - 意志